



ライフラインという言葉は阪神大震災以来、よく使

われるようになった。電気や水道、ガス、電話など生活に欠かせないサービスの供給網のことだ。

なかでも電気が文字通り、生命線になっている人たちがいる。人工呼吸器や酸素吸入器を使って在宅で暮らしている重い病気の人たちがだ。

「停電は即、命にかかわります」

全身の筋肉が動かなくなるALS（筋萎縮性側索硬化症）の増田英明さん（68）（京都市左京区）は、そう強調する。

東日本大震災に伴う停電では、手で空気を送る蘇生バッグを家族が押し続ける、車の電源につなぐといった方法でしいだ人たちがいたが、山

2011年9月21日読売大阪

## 停電弱者

形県では4月の余震後の停電で63歳の女性が死亡した。病院へ緊急搬送された人も多かった。

人工呼吸器の内蔵バッテリーがもつのは1時間程度。予備バッテリーは数万円、燃料を使う発電機は10万〜20万円もする。みんなが自前で用意しておくのは難しい。

厚生労働省は、発電機などを医療施設や保健所に備えて患者に貸し出す事業を始めたが、東京電力と東北電力のエリア以外は自治体と施設の費用負担が必要で、進んでいない。東京都は独自に、予備バッテリーや蘇生バッグを全額公費で無償貸与する事業を開始した。

「停電弱者」への支援は、急いで進めないといけない。行政だけでなく電力会社や機器メーカーも協力してほしい。

## 今日のノート